
The Last Ring

暁 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Last Ring

【Nコード】

N2119F

【作者名】

暁 琥珀

【あらすじ】

『琥珀』・・・彼女は自分の国のため、世界のために、自らの命を犠牲にしました。彼女を守り、彼女の力となったのは、一つの指輪。『リング』と呼ばれるこの指輪は、強大な力を秘めた石をはめ込み、自ら光を発するという、不思議な指輪でした。・・・琥珀が消えてから数日。平和な日常が戻ってきたところに、その少女は姿を現しました・・・。

第一章 記憶を失くした少女 一

第一章 記憶を失くした少女

『ここは、どこ?』

気が付けば、私は見知らぬ町に一人、ぽつんと居座っていた。

・・・冬なのかな? 小さな白い妖精が、灰色の空をふわふわと舞っていた。

身体に吹き付ける風が、ハンパじゃないほど冷たい。

あたりも真っ暗で、人の気配もなし。

・・・真夜中なのかな?

普通に眠り込んでしまったら、そのまま一生目がさめなくなりそう
な・・・。

でも、体は暖かった。

・・・服は、とにかく軽い。

白くて長いカーディガンに、薄く銀がかかったワンピース。

それと、革靴を履いていた。

が、この服装、なんだか鬱陶しい。

「・・・ん?」

首に指輪がぶら下がっていた。

純白のリボンに巻きついていて、首にピッタリとフィットしている。
で、指輪自体は、あまり高価そうでなくて・・・。

どこにでもありそうな普通の銀わっかに、小さな透明の石が、はめ

込まれているだけだった。

・・・売っても、そんなにお金になりそうにない・・・。
むしろ、リボンのほうが、数倍高そう・・・。
それぐらい、普通の指輪だった。
ただ・・・。。。

「おもっつー!」

・・・ただ、重たいことを除いては。

雲の間からわずかにでている月の光が、指輪を鈍く光らせる。
石は、光を反射せず、ただ透き通っていた。
そして、ほんの少しの白光が、私をじっと、睨みつけていた。
まるで、生きているかのように・・・。

「・・・不気味すぎる。」

本当に不気味。。

鳥肌が立つ。

指輪が怖いわけじゃ、無いけれど、気味が悪かった。
怖くないよ・・・。。うん・・・。

『重いだけじゃ、何にもならないし・・・。
・・・捨てよっかな・・・。』

そう思って、街中を通る川を見つけ、そこに歩み寄る。
そして、リボンを解く為に、首の後ろへ手を回す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。あれ？」

蝶結びのはずのリボンは、ボンドでくっ付いているように、全く解けなかった。

・・・・。ますます不気味だ・・・・。

今度は、頭から抜いてみようと思った。

結果は『x』

黒くて長い髪が、邪魔をする。

・・・・。

・・・・呪いか？これは。

その後、色々な方法で外そうとした。

が、結果は惨敗。

全く歯が立たなかった。

小さな妖精が、冷たい空気を分けて落ちてくる。

記憶がはつきりしない・・・。

雪の降るこの景色が、霞んで見えた。

第一章 記憶を失くした少女 二

引っ付いているリボンを必死に外そうと、頭に血が上ってきた頃だった。

「ねーねー？その指輪、いらなんなら俺にukれない？」

・・・は？

後ろに、見知らぬ男がいた。

第一印象、^{バッ}x。

年のわりにはしつかりした金髪のロン毛。

だらしなく着崩された服装。

穴だらけのセンス悪い靴。

数えられないくらいの変てこな飾り。

・・・どーみても、不良にしか見えない。だらしなさすぎ・・・。

「嫌だといったら・・・？」

その不良を見上げて、睨みつける。

いくら、いらない、捨てたかった指輪でも、こんな奴にだけは渡したくない。

はつきり言って、ウザい。

「はあ？まだ小いせえ餓鬼が。俺様、この辺りでは結構有名だぞ？それを知つての口か、それは。」

そんなこといわれても、ここがどこさえも知らないんですけど。

むしろ、自分のことも、全くわかんないのに・・・。
てゆうか、本当にこの人、馬鹿・・・？

「知りません。ほつといってください。」

それに・・・・・・馬鹿を相手にしたくありません。」

なるべく丁寧に。

だけど、本心も少し入った。

・・・まあ、当たり前か。

そして、向こうの反応も変わった。

こんなお子様に馬鹿呼ばわれされたんだもの。こういうひとはキレても可笑しくない。

「黙って聞いてりゃあ・・・餓鬼のくせに生意気な口、叩きやがって・・・。」

さっさとその指輪を、渡せって言ってたよっ！！」

言うが早いが、不良は小型ナイフを懷から取り出し、両手で構え、私に向かって真っ直ぐ突進してきた。

「っ・・・。」

危機一髪。

顔ギリギリで避けたから、頬を少しきられてしまったケド・・・。

避けた後、少しよろけてしまった私は、その場にしゃがみこんでし

まった。

何だか、とてつもなく体が重たかった。
それを見て、男は即座に向きを変更。
また、突進してきた。

（避けられない………！）

鉄の刃が、私に向かって飛んできた。

第一章 記憶を失くした少女 三

．．．ん？．．．あ、あれ？
痛く．．．ない．．．？

そつと、目を開く。

「がつつ！？」

不良が数歩、後に退く。

私の辺り、数メートルは、半円の壁が出来ていた。
オレンジ色で、透けている。

ポオオオン、ポオオオン

不思議な音を立てて、私を囲っていた。

向こうの不良も驚いただろうケド．．．。

正直、私にも何が何だか．．．。

と、不良が声を上げた。

「指輪だ．．．。指輪の力だ．．．！神の力だ！
やっと．．．やっと、見つけ出した！

・・・おい餓鬼。その結界を解いてその指輪を、お、俺にくれ・・・。

悪いことはいわねえ・・・。その傷も、ちゃんと誤る。この通りだ・・・!!」

不良は、その場に膝を着くと、土下座をした。
さっきまでのあの態度が、いっぺんに消えてしまっただった。

・・・ただ、結界だかの解き方、わかんないんだけど・・・。
それに、立てないし・・・。

「ど、どうやって解くのさ。」

とりあえず、聞いてみる。

不良は、パツと顔を上げて、私に真っ直ぐ目をやった。

「そんなの、俺様にわかるわけ・・・・・・・・。」

「俺なら、知ってるぜ?」

別の声がした。

不良の後ろから、人影が近づいてきた。

「よう、コハク琥珀」

・・・。

見るからに私と同じ年齢の、漆黒の髪の子。
右目がルビーのような紅い瞳。左目がエメラルドのような緑色だった。

・・・し、知らない・・・。

と、琥珀・・・って、・・・誰？

「おい、おまえ、結界の解き方わかんのか？

だったら、俺様の命令だ。とつとこの結界を解いて、あの餓鬼の指輪を取って来い。」

不良・・・。

やっぱり『あれ』は嘘か。全く。

少年は、不良の様子を見ると、鼻で笑った。

「ボス是指輪の為だったら、女の子にまで土下座をするようになったんですね。

正直、馬鹿みたいです。」

明らかに挑発だった。

口元が笑っている。

「ぼ、ボスうゝ？おめえの顔なんて、見たこともねえぞ？」

不良が腰にしまったナイフに、手を伸ばす。

「新入りですから」

少年が、につこりと笑って返した瞬間。

不良は少年に切りかかった。

その口は、不気味だった。

少年と、不良の間はほんの少し。

避けられるわけが・・・。。。

「・・・あつぶないなあ。新入りに、手荒いお出迎えですね。ボス？」

・・・あつた。

少年は、不良の攻撃を意図も簡単にかわし、その背後に回ったのだった。

「!？」

少年は、不良の腹に、一発拳を入れた。

ほんの、少しの時間だった。

不良が倒れると、少年は私の結界に近づいてきた。

「琥珀にしては、結界張るだけなんて、珍しいね。いつもなら、電針ぐらい、当ててるのに・・・。」

・・・結界、解けば？」

・・・は？

なにいつてるんだ？この少年。
琥珀って、誰だ？

・・・ダメだ。

考えるほど、頭が痛くなる。

結果って、体力も使うのかな・・・。

パチンツ・・・

・・・あ、

結界が、解けたみたい・・・。

少年が、近寄ってきたのが、なんとなく判った。

でも・・・私は、深い暗闇に落ちた気がした。

第一章 記憶を失くした少女 四

「・・・はく・・・」

・・・
琥珀っ！」

男の子の声で、目が覚める。

・・・痛。

頭が、鉄球で殴られてるみたい・・・。
側にいた少年が、口を開いた。

「あ、よかった、気が付いた。

なあ、琥珀。結界張っただけで倒れるって、大丈夫？
・・・てゆうか、どうやって、城、抜け出したの？」

・・・琥珀って・・・。

誰なのさ。

そして、何故城？

「えと・・・。琥珀って、誰のこと？」

体を起しながら、頭を抑えて聞いた。

少年は、目を丸くした。

まるで、びっくりした時の魚みただった。

「……え？……琥珀……だよね……？」

し、知らない……。

第一、自分のことさえ、何一つ、覚えていないのに……。
すると、単なる人違い……？

失礼な男子も増えたもんだ。

「だから……琥珀って、いったい誰のこと？」

気まずい空気が、暗闇をすり抜ける。

その空気を打ち負かすように、少年はいきなり吹き出した。

「琥珀ったら、相変わらず冗談が下手だねっ！
とぼける前に、その指輪、外しときなよっ！！」

と、笑い転げてる。

いったい、何がそんなに可笑しいのか……。
というか。指輪、外れないし。

はつきり言って、近所迷惑じゃないのかな。
夜中だろっし。この気温じゃ。

「……。指輪。外せないんだけどな。」

外せたら、こんな安そうな指輪、さっさと捨てていたよ？」

私の一言に、少年の笑い声が、ピタリと止まった。

「……琥珀が指輪リングを捨てようとした……？」

聞き取り難い程、小さな声だった。

そして、その声は、怪物に襲われたかのように、怯えていた。

「・・・俺の名前、判るか？」

少年は、私に詰め寄ると、そういった。

判るわけ、ないじゃん。

「・・・判んない。

私、自分の名前も判らないし、ここがどこかって事だって、判らないんだからっ。」

後方へ飛びのいて、腕をブンと、振り上げる。

全然、怖くなんか無かったのに、今になって恐怖が押し込めていた。泣きたくなった。

なんで、今、こんなに怖いんだろう。

さっきまで、つい数秒前まで、全く気にならなかったのに・・・。

「お前、どこから来た？どこに居た？」

少年は、質問を続ける。

今度は、近寄ってこなかったが、真剣な声だった。

「・・・。」

何も答えなかった。

・・・答えられなかった。

今の私と少年を、たとえるなら、「蛇に睨まれた蛙」。

その場から、一歩も動けなかった。

逃げ出そうと思えば、逃げられるのに・・・。

でも・・・初対面の異性に、自分のことを言うような、いい子ちゃんでもない。

「知るかよ。チビ。」

私は、元々、口が悪かったのだろうか・・・。

助けてもらった恩はともかく、他人だ。少なくとも。

それに、チビって、言ってもやれば、向こうも怒って帰ると思っていたのに、この少年は、

「アハハハッ！！やっぱり琥珀だっ！！」

・・・なんていつて、また笑い転げた。

な、何で・・・？

少年は、腹を抱えながら、続けた。

「だって、俺のこと、チビって呼べたの、この世でたった一人だけだもんっ！」

「・・・で？」

正直、もう、飽きてきた。

「で、そいつが琥珀、お前だ！！」

ふーん。琥珀ねえ。

でも・・・。それ、人違いだよ。きっと。

「あーでも待てよ？」

少年は、また真顔に戻った。

「なあ、琥珀。その指輪^{リング}、何の為にあるか、知ってるか？」

知らない。

というか、勝手に琥珀って呼びつけないでよ。

「・・・まさか、知らねえのか、本当に。」

黒い癖っ毛を、かき上げる。

その通りだよ。

で、そんな目で見つめないでほしい。
何も言えなくなってしまうじゃない。

「あのね？言ってる意味が、全く判らないんだけど。
私は、琥珀なんかじゃないの。」

「じゃ、名前、なんて言うの？」

即答。

しかも、答えられない。

「どこで生まれて、どこで育ったのか、言えるか？」

「・・・・・・・・・・。」

・・・何も、言い返せない。

覚えていないんだから。

自分のことは、何一つ。

「ふーん。覚えてないんだ。」

何故判る。

「でもなあ。琥珀に妹いたなんて、聞いたこと無いしなあ……。」

知るか。

「とはいえ、お前、琥珀そっくりだ。瓜二つ。」

そーですか。

「あ、そうそう、忘れてた。なあ、琥珀……。」

「琥珀じゃないっつー!!！」

キレた。当然です。

「何も言わずに聞いていたら、何!？」

人のこと、勝手に『琥珀』なんて、呼びつけて！
からかうのも、いい加減にしてくれない!？」

少年が、何もいえなくなっているのを見て、私は我に帰った。

……少年の目が、変わった。

寂しい、冷たい瞳^め

「そつか、そうだよ……な。」

琥珀なわけ、無いよな……。」

少年は、その場に座り込むと、一粒の透き通った涙を流した。

宝石のような、紅色と緑色も、
泥にまみれたように、光を失っていた。

「・・・。」

なにも、いえなかった。

泣き止むまで、待つしかなさそうだった。

.

第一章 記憶を失くした少女 五

「……でね……琥珀は……。」

現在、私はこの少年、瑠衣^{ルイ}と一緒に、長すぎる一本道を歩いている。女の子みたいな名前つて、笑ったら、

「琥珀も初めてるとき、そういった」
だつてさ。

瑠衣が泣き止んだ後、あの町を出て、隣の町まで歩いている。
な、長い……。

でも、何だか、全然疲れないんだよね。
……何故だ……？

それで、この道はとにかく真っ直ぐ。
木がちよこちよことあるだけで、岩の「い」の字も無い。
土を掃っただけの簡単な道を囲むように、短い草が揺れるだけ。
なんか、こうゆうのを野原っていうのか……？
て、というのが感想。

暖かい陽だまりは、朝つて言うことをはつきりと示し、
太陽の光を浴びて、小さな花たちも嬉しそうに香りを飛ばす。
その香りは、少し冷たい風に運ばれて、
遠くの間まで、まるでタンポポの綿毛のように私の隣を通り過ぎて
いった。

陽が、首もとの指輪を目立たせる。

「・・・瑠衣。」

「何？」

ある重要なことに気が付いて、足を止める。

待っていたかのように、お腹がグルル・・・と、鳴った。

「お腹空いた。」

「・・・もうちょっとだから・・・多分。」

おいおい・・・。

多分ってなんだよ。多分って。

・・・なんか、嫌な気がした・・・様な。

「まったく町なんて、見えないんだけど・・・。」

「山をも一つ越したとこだから・・・。ねっ？」

ねっ？ ジャーよ。

山を一つ越すって・・・。

指輪が、これまた重く感じるんですよ。

本当に手放したくなる・・・。

不幸は人生の付物おまけなのか・・・？

バイクの音がした。

一台だけじゃない。

何十もの音が重なって聞こえた。

「オラオラオラオラッ！！！！！！」

生意気な糞餓鬼共！！見つけたぞオ！？

もう逃げ場はねエぞ！？」

・・・嫌な予感的中。

バイクの音が大きくなつたのに気が付いて、振り向いた時には、周りは、バイクの群れと化していた。

そしてその先頭には、あの不良。

てゆうか、偉いって本当だったんだ。

正直、信じてなかった。

「あれ？ボス。またヤラれに来たんですか？

こんなに大勢の、先輩方と一緒に。」

瑠衣が挑発をした。

ホントに好きだな。コイツ・・・。

「ああゝ？コイツ、新入りっすか？ボス。」

モヒカン頭が言った。

「僕？僕は新入りですよ？ついさっき、ボス直々に挨拶しに言った

んだから。」

「おい。餓鬼。

新入りのくせに、ボスの名前を呼ぶとは、失礼だぞ……！」

と、瑠衣の後ろにいた、長髪が拳を振り上げた。

「……！あぶな……」

バキィッ。

………。

私の心配は、まず意味が無かった。

瑠衣の後ろに、さっきの長髪男が伸びていた。

「……いやさ、殺^やられる前にやったんだけど……。
蹴りだけで倒れるなんて……。弱いね。この人。」

ニツと笑った顔は、殺意に満ち溢れていた。
……怖っ。

「掛かってきなよ？全員遊んであげるから。
……ただし。琥珀に手エ出したら、

………殺すから。先に言っとくよ。」

「~~~~~っ！！殺っちまえ！！

餓鬼だろうが、手加減は無用だ！！！！」

真っ赤になった不良がいった。

とたんに、バイクごと押し掛かって来る。
まず、瑠衣に襲い掛かってきた。

て。え？

死んじゃうじゃん！！

バカ瑠衣！！

パンッ！

破裂音がした。

瞑っていた目を開けると、さっきと同じ、オレンジ色の結界が
瑠衣を囲んでいた。

瑠衣は、手を突き出して、真剣な顔つきだった。
てことは……。

瑠衣の結界？

「ちィ。魔術師かよ……。

厄介だな……。」

不良の言葉に、瑠衣は笑った。

勝ち誇った笑みだ。

「おい、ヤロー共、

魔術師は後回しだ。女のほうを殺れ！」

その一言で、瑠衣の結界は解けた。

瑠衣の周りにいた、バカそうな人たちは、私の周りへと移動を開始
した。

私と瑠衣の幅は、だいたい数メートル。

逃げられる訳が無い。

でも、結界はどう出すのか知らないし……。

バイクに乗った一人が、短剣を取り出し、私に投げつける。

座り込んでしまった私の前に、紅いローブが舞った。

「・・・なあ。」

琥珀には、手を出すな・・・って、言ったよな。俺。
手を出したら・・・。」

瑠衣は、空を切ってきた剣を、素手でつかむと、
不良たちを睨んだ。

「殺すってことも、言ったはずだよな・・・？」

第一章 記憶を失くした少女 五（後書き）

次回。瑠衣がキレます。注意してください。

第一章 記憶を失くした少女 六

「殺すってことも、言ったはずだよな？」

瑠衣の一言に、不良たちの勢いが、一気にしぼむ。

・・・これ、本当に瑠衣？

さっきまでの、あの軽そうな瑠衣は何処へ？

なーんか、別人・・・みたいなの・・・。

まず、威圧感がハンパじゃない。

殺気が、あたり一面に広がってるような・・・。

正直、私も怖いくらいだし・・・。

・・・て、魔術師？魔法使いなもの？

あ、それならさっきの結界も、なんとなく判る・・・気がする。

「・・・っ魔術師っただけで、調子に乗るんじゃないよっ！」

短剣を投げてきた、先頭の不良が、バイクごと突っ込んできた。
続いて、後ろのも雪崩れ込んでくる。

瑠衣、結界でも張るかな・・・？

「あゝったくも。めんどっちな。」

でも、ま。全員相手してあげるって、最初に言っちゃったからな。

「

瑠衣。

それ、笑いながら言う台詞^{セリフ}じゃ、無いでしょ。

「う〜ん。せっかくだから、捕まえて、国にだそっかなあ・・・。」

え・・・と。

なにそれ、この人達に与える刑を、考え中・・・？
の、のんきすぎ・・・。

「なにぶつぶついつてんだよ！！」

向こうの一言で、瑠衣がばつと顔を上げた。

「うん。じゃあ閉じ込めの刑に処す！」

嫌嫌嫌。

笑顔でその言葉は、怖いよ。

そんなに明るい顔で言われても、怖いもんは怖いよ。

「はあ？なに言ってたんだ？こいつ。」

バイクの群れが、一瞬だけ止まった。

瑠衣は、それを見て、ニツと笑った。

そして、さっきと同じように手を突き出す。

手から、オレンジを帯びた、白い光が飛び出す。

呪文とかは、無いみたい。。

その光は、あっという間に皆をひつくるめると、

丸い、泡のような形に姿を変え、透明な（オレンジ色）しゃぼん玉
になった。

バイクも、人も、皆。

その泡の中で、キョトンとしていた。

何が起きたのか、うまく飲み込めないようだった。
そして、殺されてしまうのかと、怯えていた。

・・・私だって、わからないさ。

とにかく。

瑠衣が、強そうなのは確かだ。

・・・で、あれ？中の人達、倒れてく・・・。

「・・・ん。大丈夫。殺したりはしないよ。さっきのは冗談。

こんなに沢山の人、殺しちゃったら、

俺、殺人犯になっちゃうもん。」

ニコリと笑う瑠衣。

・・・怖。

気絶させたってか。

その様子を見ていたリーダーの方の不良は、

あいた口を、閉じることが出来ずに、突っ立ってた。

「・・・で、

次はボスですか？」

返事を聞かずに、瑠衣は不良の後ろに回りこむ。

で、さっきと同じように、泡を出すかと思いきや。

・・・瑠衣は、不良の髪の毛をつかんだ。

「~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ!!!!!!」

・・・髪の毛イコールカツラ。

どーりで、いい年して髪がすっかりしてると思った。
カツラを取られた、不良の頭には何も無し。

「うギャああああああアああああアあつつ！！」

「・・・。」

イヤー。速い速い。逃げ足だけは。
というか、なんか可哀想になってきたよ。不良が。

「うーん。あいつがカツラだったのは、ホントだったんだ。」

おい。

そんなに普通の顔をしなさんな。

「んじゃ、行きますか。
もうすぐだし。」

瑠衣が、歩き始めたので、
私も、それについていくしかなかった。

・・・あ。

あの不良の皆。

どうなったんだろう・・・。

第一章 記憶を失くした少女 六（後書き）

あ、あの人は寝てますよ。

泡が割れたら、落ちた勢いで起きると思いますけど。

第一章 記憶を失くした少女 七

「琥珀はね……。」

と、やっぱり琥珀の事を持ちかけてきた。
不良たちを後にして、何歩歩いただろう……。
かなりの時間を、歩きですごしたような。

ちなみに、『隣の町』までも行っていないのだが……。

今のところ、最終目的地は瑠衣の故郷。

もうすぐ着くらしい、町のすぐ側だとさ。

数年帰っていないらしいけど。

琥珀も、あの町にはよく行っていたらしい。

毎回、歩きですか……？

遠すぎるでしょ。それだと……。

ま、それはともかく。

何にも覚えていない私には、いく所も無かったのだ。
ついていくことにした。

あんな、暴走族がいる、凍え死にそうなところはもうコリコリだ。

それに、瑠衣のお母さんは、記憶とかについても詳しいらしい。

……解剖とか、されないよね……？

て、私。

なんで知り合ったばかりの少年を、ここまで信用できるんだろ。

普通、警戒とかするんじゃないかな。

変な感じだなあ。

「琥珀は女の子のくせに、男以上に気が強くて、城にいるのはつまんないって、俺とよく脱走したりしてたんだ。」

「城!？」

「うん。」

平然と答える瑠衣。

当たり前なのか？

しかも、琥珀って子。

城にいるのがつまんないって……。

どれだけワガママなんだろう……。

「なんでそんなに退屈だったのかな？」

ちよつと疑問になった。

お城だなんて、想像しただけで、居心地いいのに、そこにいるのが、何で嫌だったんだろ？

「んー……。」「

瑠衣はちよつと上を向くと、

「琥珀の一族は、代々長く続いてきたものだし……。それに……。」「

で、またちよつと間を開けた。

「儀式とか、なんだとか、嫌いだったんじゃないかな？」

・・・。

ふーん。

「・・・なんとなく、琥珀の気持ち、わかるなあ。」

「ん？」

別に、自分がそうゆうこと、体感したってことは無いんだけど。なんとなく、自分もそんな感じがした。

しばらく経ってから、また瑠衣が話し出した。

「やっぱ、あんたになら話してもよさそうだ。」

「・・・？」

なんのことさ？

しかも、あんた呼ばわりかい。

「・・・琥珀の母さんは、神様だってこと。」

・・・瑠衣の言葉を、真面目に聞こうとした私がバカだった。こいが真面目腐った話をするわけが無い。

「神様なんて、この世の人々が創り出した、想像の象徴でしょ？
第一、神様がいたとしても、子供を生むわけ無いんだし。」

驚いた目で、瑠衣はこちらを見た。

「・・・やっぱ、琥珀と同じこといった。」

・・・またか。

もう、どうでもよくなってきた。

瑠衣は続けた。

「・・・それはともかく、その指輪リングはね、

その神に、召された人が、本人から受け取るの。

琥珀の場合、『愛された』が正しいかも知れないけどな。」

「ふーん。」

その後も、瑠衣の説明は続いた。

何も話さないよりマシだったから、聞いていた。

指輪リングは全部で七つあって、

それぞれに、『属性』っていうものがあるらしい。

種類は、『光』レイ、『風』シウ、『日』テル、『水』エト、『月』ルナ、『火』ロガ、『闇』シン。

お、覚えられん・・・。

で、琥珀の指輪リングは、光レイ。

そのほかの指輪リングは、各国に預けられて、その国の召された人が守っていたらしいけど・・・。

「ある人が闇の扉を開いたせいで、封印されていた怪物が復活。召された人はもちろん、沢山の人が殺され、国が滅んだ。」

瑠衣の瞳は、影がかかったようにも見えたが、それでも真剣だった。

「指輪のほとんどが、その怪物に奪われたけど、光属性の琥珀の指輪は、闇に飲み込まれない。・・・つまり、奴らの手に入らなかった。」

うなずくことも出来ずに、ただただ聞いていた。

「・・・光属性の指輪は、他の指輪よりも遥かに力が強いんだ。もちろん、その反動も。

指輪は持ち主が死なないと、その元を離れない。

だから、残った指輪の持ち主、・・・琥珀は皆を守ろうとした。

・・・琥珀の国が襲われた時、琥珀は指輪の力をすべて使った。奴らは引いた。今もその国は無事に活動している。けれど琥珀は・・・。」

土を踏む足が止まる。

語尾が震えていた。

私自身、凍りつくような感覚に襲われるぐらいだった。

・・・なんとなく、予測していたのかもしれない・・・。

聞こえないくらい、小さな声で瑠衣は言った。

「
・
・
・
・
・
・
死んだんだ
・
・
・
。」
」

第一章 記憶を失くした少女 八

死んでしまった人、『琥珀』に似ている私。

・・・私、いたい誰なんだろう。

普段のこと、身の回りのことは覚えているのに、自分の名前や、自分の家族、友達の名前・・・。

どれも、自分に関係するものだけ、切り抜かれたように覚えていなかった。

多分、瑠衣は勘違いしているだけで、私の知り合いじゃなかったかもしれない。

・・・。

謎だ・・・自分のことだけど・・・。

「んー。」

ふと、瑠衣が口を開いた。

「まったく、足が痛くなってきた。

これだから歩きでいくの、嫌いなんだよなあ。」

・・・。

歩きで行くのが、嫌い。

てことは・・・。

「他に移動方法があるわけ!？」

ちよつとキレた。

こんな辛い思いして、足の豆がつぶれて硬くなっちゃうほど、散々歩かせておいて……。

「いつ!？」

あ、ああ、あるっちゃ有るんだけど……。」

あやふやな返事。

私、こうゆうの、大ツツツ嫌い!

「あるなら先に行つてよ!

ったく、気が利かないんだからっ!」

はき捨てるようにいつても、やっぱりまだイラツとくる。

こんな自分が嫌になる。

困り果てた瑠衣がいった。

「つても、琥珀、お前何も覚えてないんだろ?

魔術使つにも、琥珀の魔道がないと出来ないし……。」

……。

は……?

魔術は聞いたけど、魔道……って、なにさ。

瑠衣はつづけた。

「……あーつも、

つまり、瞬時に移動するには、琥珀自身の能力が扱えないと、できないの!

今の琥珀は、何も覚えてないんだろ!?

だから、全く使いもんにならないんだよっ。」

「・・・。」

なにキレてんのさ。」

「・・・・・・・・つ。」

早口になつてゐる「イラついている。
瑠衣の行動パターンはこれで決定。

・・・。

ところで、能力を扱つてことつて・・・。

「・・・・・・・・こうゆうこと？」

まず、全身の力を抜く。

ここで抜きすぎると、波動がハンパないみたいだから、少し加減を加える。

んで、体の隅まで力が行き渡つた・・・気がしたら、
それを一箇所に集中させて、形にする。
そうすれば・・・ほら。

「氷の刃の出来上がり。」

私の手の中には、小さな、それでも十分鋭い刃を持った、
氷で出来た剣(けん)があつた。

いつてみれば、短剣の形をしている。

透き通つて、少し冷気を発してる剣。

それが、二本、私の手のひらで浮いていた。

「・・・凄え・・・。」

そつくり。琥珀の剣と瓜二つだ。」

「そうじゃなくて、これでいいんでしょう？
瑠衣のいう、能力・・・魔道の使い方。」

ハッとして、瑠衣は言葉をだした。

「ああ。うん。それでいいんだ。」

「じゃあ、早く行こうよ。
歩くのはもうこりこり。」

「？」

歩くよ？」

「・・・は？」

なんですと？

楽っていうのに、また歩くの？
・・・。

もう、嫌になつてきた・・・。

「空を、空中を歩くのさ」

と、瑠衣は地面をトンツとけり、
そのまま宙へと舞い上がった。
んで、振り向いて私に言った。

「簡単だぜ、結構。」

刃を作れるくらいなら、こんなの屁でもねえし。」

・・・屁つて・・・。
・・・馬鹿。

とゆうことで、同じように地を蹴った。
体が軽かった。羽根みたい。

浮いて瑠衣の隣に並ぶと、頭を殴った。

「いいゝゝゝつてっ!」

「女の子の前で、屁とか言っんじゃないっ!」

「つつゝ。」

「ゴメンナサあい・・・。」

「誤るならちゃんとしなさいっ!」

「わわわっ!御免なさいっ!お許し下さいっ!」

・・・ん?

この感じ、前にもどこかで・・・。
・・・。

気のせいか・・・な?

「んじゃ、あとは簡単。」

瑚珀は俺の後をついてくればいい。

この移動法なら、太陽の周りを一秒でだっていけるんだぜ」

「え、嘘、それホント?」

太陽を・・・一秒で・・・って、

普通、ありえないでしょ……。

「嘘じゃねえよ。」

だって、琥珀がやってのけたんだぜ、最初に。」

得意の笑顔で瑠衣は言った。

琥珀が、最初に……。ね。

すごい人だったんだ、琥珀って人は。

その分……。

どれだけ周りの期待を背負っていたんだろ……。
我慢とか……。沢山してたんじゃないのかなあ……。

「ねえ、瑠衣。」

「ん？何？」

一呼吸あけて、私は言った。

「……。琥珀は、幸せだったのかな。」

第一章 記憶を失くした少女 九

「おっし、着いたぜ

俺の故郷、『ヌイルスアイル』!!」

「え、もう?!」

空を「歩き」はじめて数分。

小さな山と丘を越え、さらに平原を進んだ所で、瑠衣は降りた。

目の前に広がっていたのは、オレンジ色と緑色がマッチした、小さな村。

レンガとつたが、いい具合に合っていて、なんだかかわいらしくも見えた……。

瑠衣が積み重なったレンガでできた、少し大きめの門のそばに近寄る。

そこには1人の……

1人……?

小さな……緑色のトカゲみたいのが、よろいに身を包んで立っていた。

「やつほ、レイガル。久しぶりだな!

ずいぶん昇進しちゃって……立派だなあ。」

「ああ溜衣様！御久しゅう御座います！！
はい、おかげさまで此処までこれました・・・。」

・・・！

トカゲの声は、見た目以上にかわいらしく
溜衣を見つめる目も、愛らしい感じがした。

レイガルと呼ばれたトカゲは、私に気がつく
大きな目を、よりいっそう大きく見開いた。
誰がどう見たって、驚いているようにしか見えない瞳だった。

「る、溜衣様・・・
こちらの方は・・・。」

「おう、琥珀だ。
・・・っと、ちょっと急いでいるんだ、通してくれるか？」

「ちよっとっ？！」

私の言葉は無視か。
琥珀じゃないのに・・・。
まず誰かもわからないってのに・・・。

「それが溜衣様・・・今、御通する訳にはいかないのです。

その・・・トウイル一家に犯行予告が届いております・・・。」

「トウイル？誰だ、そいつ？」

「一ヶ月前に入居し始めた、いたって普通の４人家族でございます。普通じゃないといえば、１２歳になる娘さんが魔道を使えるのどつと・・・。」

「ほう、それで？」

だめだ。まったく話がわからない。

まあ、聞いてみたところ、そのトウイル一家に届いた予告は

「本日、一人の娘が尋ねてくる。その娘は魔道を使い、そなたら家族を殺すであろう。」

「避けたければ、前夜、カラサの丘に５０フェル用意しろ。」

と、まあ、普通に普通すぎる脅し強盗。フェルっていうのはお金の単位みたい。・・・で、なに？『カラサの丘』って。

「・・・で、結局用意できなかったから、誰も村に入れないと。そういうことだな、レイガル。」

「・・・はい。」

「・・・。まあ、お前が俺らを疑っているわけではなく、単に上に命令されたからってというのは よくわかった。」

意味ありがちなレイガルの顔を見て、つぶやくように瑠衣はいった。それから私に向かってこういった。

「今日は無理みたいだ。

明日なら平気だよな、レイガル。」

トカゲは短く、はっきりと「はい」。

なんだか、初任務を任された幼い後輩、みたいな感じだった。

さっきの会話に出た、「カラサの丘」。

あれが何か気になったから、とらえずつれてきてもらった。

一旦、普通に見れば、よくある緑の広がった丘。

特に何の特徴もない。

特に、どころじやない。何も無い。

所々、小さな花が咲いているだけ。

赤色だから、小さくてもよく目立っていた。

「ここはさ、緑しかないところだけど、木も空気も澄んでいてあの町にとつても、一種の休憩場みたいな、落ち着けるところだったんだ。」

しゃがんで赤い花を見ながら、瑠衣の話に耳を傾けた。

にしても・・・見るたびに綺麗だな、この花・・・。

単純な赤じゃなくて、・・・んー・・・なんていえばいいのかな。

真紅に似た色。宝石であるルビーのような輝き。とれたてのリンゴの艶めき。

いろんな「赤」が、見事に一致している感じだった。

瑠衣は続けた。

「だけど、ある日誰かが放火したみたいで、この丘も燃えてしまったんだ。

木は倒れて、空気は濁り、丘自体が酷く変化してしまった。

そんな時、「カラサ」っていう旅人が現れてな、

その・・・丁度琥珀が見ている、その花、「シアル」っていうんだけど、

その花を植え始めたんだ。

カラサの行動は、町の人たちに大きな影響を与えて、町の人たちも木や草花を植え始めた。

で、無事に丘は復活して、旅人は去った。
きっかけを与えてくれた、その人に感謝して、丘にその人の名前を付けたとき。

あー・・・、琥珀、聞いている・・・？」

「うん。聞いている。」

私の態度を見て、「聞いている」といわれても、誰も信じないだろうな。

だって・・・ね。

太陽に当たろうと、力いっぱい広げた6つの赤い花びらも、真ん中にひよっこり顔を出している、黄色いめしべも、かわいくてしょうがなかった。

摘んでみたい心境を抑えて、立ち上がると

「んじゃ、今日の宿、探さなきゃな」

と、いった瑠衣の背中を、追い越す勢いで飛び立った。

・
・
・

なんとなく、風がおかしい感じがした。

花・・・シアル・・・？

何か言いたげに、風が私の頬を撫でた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119f/>

The Last Ring

2010年10月28日08時46分発行